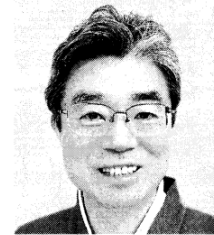


朝を  
ひらく

永田 円了  
真国寺住職



人は相手をどのように呼ぶかによって、自分とその人との関係性を表す。特に配偶者を第三者に伝えるときの呼び名には興味深いものがある。その方はパートナーのことを「うちの嫁は、」と呼んでいた。子供服店を営む心やさしい40代のM氏が使うコトバとして、私は何か違和感を感じていた。

嫁というコトバには、封建的な家制度の響きがある。約70年前に民法改正で廃止された「家制度」が、いまだに亡霊のごとく日本社会にはびこっているのだろうか。家制度とは、戸主を中心とする家単位で戸籍をつく

嫁・旦那か 妻・夫か

る制度。まさに家父長主義の考え方である。

結婚とは夫となる男性と妻なる女性が、親の戸籍から出て、新しい戸籍をつくる。これが現在の結婚制度なのである。よって家制度特有の「本家」「分家」「嫁入り」「婿取り」というコトバも過去の遺物である。

実は最近M氏に大きな変化があった。「私の妻は、」と話し始められたのである。気づいた私の指摘に、頭をかきながら

「確かにそう言いましたよね」と本人もビックリ。無意識に発せられたコトバの変化は、奥さんに対する彼の意識の変化を物語る。「嫁」から「妻」への呼び替えは、配偶者に対する彼の平等感覚への変容なのではなからうか。

1964年アカデミー賞受賞作「マイ・フェア・レディ」では、女性に対する態度の違いが顕著に表されている。女性を物のように扱うヒギンズ教授、かたや淑女として女性に対応するピカリング大佐。最後にイライザを演じるヘプバーンの台詞が圧巻である。「レディーと花売り娘との違いは、どう振る舞うかではなく、どう扱われるかで決まるのです」

日常何げなく使う呼称、知らず知らずのうちに相手を枠の中に入れて支配し、また支配され、無意識であるが故に自分も相手もその色に染まってしま

う。 娘夫婦が結婚した当初、娘は配偶者を「うちの旦那」と呼んでいた。旦那は、サンスクリット語「ダーナ」の音写。ダーナは「ほどこし」「布施」の意味で、施主や檀家という言葉もそこからきているのである。私は娘に、ただ施されるだけの関係でいたいのか、と問うと即座に彼女はパートナーの呼び名を「夫」に替えた。今は「夫」「妻」の呼称で定着している。

すでに法律も制度も変わっているのに、風習や習慣というものは根強い。意識を変えてからコトバを替えるのもひとつ。また思い切ったコトバを新たにすることから始めるのもいい。

意識変えコトバ新た